

あかるく かしこく たくましく

令和5年4月26日 No. 4 文責：校長 佐野紳二

「自分の命は自分で守る」ことができる子どもに

4月19日（水）の1・2校時、1年生を対象にした交通安全教室がありました。毎年、この時期に1年生を対象に実施しているこの交通安全教室。保育所や幼稚園に通っている頃は、ほとんどの子が保護者の方の送迎またはスクールバス等でそれぞれの場所に行っていたのが、小学校入学と同時に自分で歩いて学校まで通うことになるため、道路歩行時のルールを守って安全な登下校をすることが、ほかのこと以上に大切であることから、入学後、できるだけ早い時期に実施しています。私も交通安全に関することが何より大切なことだと考え、入学式の新入生を迎える言葉の中で、交通安全に絞った話をさせていただきました。



入学式の校長の話はNo.00（入学おめでとう）に掲載しています。

ある調査^{*1}によると、平成30年から令和4年までの5年間で、小学生の歩行中の交通事故は、小学校1年生の死者・重傷者数が6年生の約3.2倍、死者に絞ると1年生は6年生の10倍に上るそうです。また、1年生の事故が多いのは5月中旬だそうです。小学校に入学した緊張感が少し緩み、登下校に慣れてくるこの頃に注意が必要ということになるようです。（そんなこともあってか、今年は例年4月に実施している春の交通安全週間が5月中旬の実施となりました）

※1 政府広報オンライン <https://www.gov-online.go.jp/>



交通事故から自分の身を守るために必要なことは、何といっても交通ルールをしっかり守ることでしょう。1年生の交通安全教室では、駐在さんが子どもたちに「道路に飛び出さない」「道路で遊ばない」「右側を歩こう」「横断歩道を渡ろう」の4つの約束を教えてくださいました。また、1年生の歩行中の交通事故が「横断中」に起こっていることから、以下のことを子どもたちにしっかり教えることも大切です。

- ・横断歩道橋、横断歩道や信号機が近くにあるときは、そこまで行って横断する
- ・横断する前に、「必ず立ち止まる」「右左をよく見る」「車が止まっているのを確認する」
- ・横断歩道では、手をあげる・手を差し出す・運転者に顔を向けるなどして横断する意思を表示する
- ・信号が青のときも、必ず右左を見て、車が止まっていることを確認してから横断する
- ・横断中も、右左を確認しながら歩く

もちろん、これらのことは1年生だけが教わればいいということではなく、すべての歩行者が気をつけなければならないことです。「手をあげて横断歩道を渡る」という行動は、だんだん恥ずかしさが出てきてやらない子が増えてきますが、運転者に顔を向けてアイコンタクトを取るなど、代わりになる行動はできるはずです。

また、連休明けの5月8日、9日には3年生の自転車教室が行われます。小学生全体の大きな交通事故の原因を調べてみると、歩行中が全体の59.0%を占めて一番多く、次に自転車乗車中が32.4%となっていますが、自転車事故は年齢が上がるるとともに増え、小学校5・6年生では自転車事故の件数が歩行中の事故の件数を上回



るようになります。(自転車事故が最も多いのは4年生です。ちなみに歩行中の事故が最も多いのは1年生、交通事故が最も多いのは2年生です)※²最近では、自転車による加害事故も増加しており、令和2年10月から自転車の保険加入が義務化、今年度からはヘルメットの着用が努力義務化されました。

※2 データはいずれも内閣府の調査(平成29年から令和3年までの5年間) <https://www8.cao.go.jp/>



交通事故があると、車を運転していたドライバーはその責任を問われます。しかし、車と接触したり轢かれてしまったりしたときに、怪我をするなど痛い思いをする(場合によっては命を落としてしまう)のは、歩行者だったり自転車に乗っている者だったりします。やはり、「自分の命は自分で守る」と考えておく必要があるでしょう。そして、子どもたちが自分自身で自分の命を守ることができるようになっていくためには、最初の確認(場合によっては指導)が大切です。登下校を始めた1年生の時期、自転車に乗り始めた時期、それぞれの年度のはじめなど、節目となる「はじめ」の時期に、歩行の仕方や自転車の乗り方、交通ルールの確認をしっかりと行うことがとても大切だと思います。学校でもこれらのことについては折に触れて指導を行います。ぜひご家庭でも子どもたちと交通安全についてのお話をしていただければと思います。

「そこでペダル踏んで！」

私の声も空しく、ピンクの小さな自転車は横転する。〈ガシャーン!〉

振り返った娘(小1)は泣き出しそうな顔で訴える。

『手離さないで』って言うてるでしょ



さっきからずっとこの繰り返しだ。

「でもずっと支えてたら練習にならないよ、ほら、もう1回」 「……………」

「もう1回！」黙ったままの娘に私の語気も少々きつくなる。

「ペダル踏んで」〈ガシャーン!〉 「もう、乗れなくてもいいもん」

娘は泣きながら家に帰ってしまった。

「やれやれ」、自転車を起こしている私にとちゅうから様子を見ていた妻が言う。

「ちょっと急ぎすぎじゃない」 「そうかな」

「少し怖かったし」 「でも効率よく進めないと」、と言いかけて、私はふと自分に問いかけた。

(効率よく進めないと何がマズイ?)

晴れた日曜日の午後だ。そうだよな、仕事じゃあるまいし、何も慌てて「成果」を求めることもない。のんびり娘と練習を楽しめばいいじゃないか。

妻にとりなされて娘が戻ってきた。

「そう、いい感じ、そのまま漕いで」 「まっすぐ走れてる？」娘の声が弾む。

「OK。じゃ今度は手を離すよ。いい？」 「うん。そーっとね」

すると自転車はスーッと……。 〈ガシャーン!〉

まあ、そううまくはいかないな。けれど倒れてこちらを振り返った娘は笑顔だった。

「少し走れたね。パパ、もう1回！」

《花王 暮らし百景 より》